政教時報

第二十二號

明治三十二年十一月十五日發行

大日本佛教徒同盟會綱領

一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道德を涵養し品性を陶冶する事。

二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。

三、佛教護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。

四、各宗僧侶を奬勵し、其學德を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。

五、政教問題を研究して、政府をして公認教制度を立てしむる事。

六、社會問題を講究して慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。

七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を奬勵して、善良なる家庭を形作らしゆ又社交を融和せしむる事。

八、積極的方針を取り、實業道德を鼓舞する事。

九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。

十、社會に於ける一切の迷信を勦絶する事、

十一、殖民傳道を奬勵する事。

十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講する事

目次

社說

◎公共的事業の不進步

論說

◎思想界の無政府と半熟の進步派　森川一

◎陸海軍の諸學校に佛教々師を容るゝの必要　在大學　西山榮久

社會

◎眞宗大學◎眞宗の三者宿◎保護すべき教育◎運動會◎貧民と醫師◎說教僧◎新平民

雜錄

◎雲水雜記(二)　在大學　久保猪之吉

信眞

◎朝參暮請錄　文學士　加藤玄智

令普

◎奧村五百子傳(七)　文學士　秦敏之

會報

◎越前南越佛教同志會◎婦人仁愛會◎長門下の國佛教青年倶樂部◎會頭我侯爵久一行信越巡回記事◎信濃南北佐久郡宗教同盟會◎北信佛教徒信濃國民同盟教徒同盟會◎越後長岡の演說會三條の演說會

政教時報

公共的事業の不進歩

國民の公共的觀念に乏しく公共的事業の進歩發達を企畫すること能はざるは實に其國民の我利的根性を發表せるものにして國民の一大恥辱なり

今や國民の我利的根性は其頂點に達せり、公同事業の振はざること今日の如く、公德の缺如すること今日の如き未だ之有らざるなり、市街鐵道事件の如き、横濱埋立事件の如き、明白に此間の眞相を曝露するに足るものにして眞に痛嘆するに堪へたり、我利的論者が常に口にする所を聞くに、曰く目的は手段を神聖にすと、彼等は善良なる目的の爲には手段の陋劣鄙惡なるを厭はずとなし、此唯一の口實を以て幾多の卑劣なる手段を行へり、然れども卑劣なる手段を行ふの人にして能く眞摯善良なる目的を有し得るや否や、余輩は彼等の所謂目的も手段も共に社會を混濁するの不正なる意志に基くなきかを疑ふ、此に於てか余輩は斷乎として手段の陋劣ある者も目的の不正なる者も一切國外に放逐して以て正義の爲に一大決戰をなさゞるべからず、國民の血液を吸收して自己の繁榮を計らんと欲する寄生蟲は國民全體の健全なる發達をなさんが爲に之を排除せざるべからず、唯夫れ公共的事業の爲には、余輩は其精神を盡し、其勞力を甘んじ、其財産を盡し其身命を投ずるも敢て憂ふる所に非ず、公共的事業の擧るると擧らざるとは、其時代精神の趨勢如何を卜すべく、其國民の道德的標準の高低如何を推知するに足るべき妥當の觀察なり、我邦現時の趨勢は確に公共的事業不振の一大困弊を有す、戰勝膨脹の後を承けたる日本國民が、却て淸韓兩國民の如きグヅ的、非公共的のケチ根性となりて「マンモニズム」の弊害のみを取らんとすることの何ぞ不甲斐なるや、

今や粗忽なる世の論者は如何にして國民の道德を刷新すべきか、如何にして國民の思想を淸淨ならしむべきか、如何にして國民の志氣を皷舞すべきか、如何にして國民の敎育を完全ならしむべきか、如何にして國民の自然に要求する宗敎心を滿足せしめ得べきか、此等の根本問題を放擲して枝葉末節に拘々し、只攻擊を以て自ら快とし、破壞を以て唯一の能事とし、組織建設の方法に就て充分明了ある答解を與ふる能はず是をしも尙責任ある人と稱すべきか、

今や帝國議會の開期近きに迫る、政府は頻に買收の政策を講じ、高利貸、壯士、待合の女將、紳商等幾多の醜怪なるものが漸く幅を利かすの時は來らんとす、此間に立ちて能く國民の代表者となり、能く國民の聲となり、能く節操を維持し、能く自己の主義意見を貫徹し得るもの果して幾人ぞ、

敎育、宗敎、社交等、國民の智識を啓發し、國民の思想を淸新ならしめ、國民の公德を助長するに足るべき公共的事業は今日に於て殆んど皆無に屬す、其贅澤費を減じ、其庭園を賣り、其邸宅を縮小して、社會公共の事業の爲に投せんと欲する一人の精神家なき現時の社會は、明かに國民道德の最低氣

壓を示し、一大暴風の土を捲て起らんとする警報を暗告せり株式熱相場熱の漸く實業界を腐蝕せんとするか如き、政治家と實業家の間に怪しきコンミッション行はれんとするが如き、醜惡鄙劣なる新聞記者の無根の記事を以て人を中傷し而して社會に横行せんとするが如き、忌むべき殺人犯の屢々新聞紙上に見はるゝが如き、巡査と鬪ふ墮落書生あり、村長を毆打せる視學官あり、勸工場に掏摸を働くの少年學生あり、文部省が遂に學校警察令を起草するに至れりと傳ふるに及びては余輩は此く迄に、國民の倫理道德の頽敗するに至りし力を思ふて轉々痛嘆の至りに堪へず、嗚呼是れ誰の罪ぞや、國民の我利的根性を打破して、道德の標準を高くし、法律の命ずる所、行政の干涉する範圍の上に立ちて大に國民の公德を振作すべきことを怠るべからず、國家の行政立法に關する事を以て獨り政治家官吏輩のパテントなりと思ふ勿れ、敎育の振興を以て獨り敎育家の專有なりと思ふ勿れ、社會の改善、道德の振張、其他國民の前途に横はる緊急なる問題は、國民全體が相共に解釋し、相共に運動し、相共に厲行すべき問題にして何人と雖之に容喙するの權利を有す、敎育家とは獨り代議士に限るべからず、政治家とは獨り代議士に限らざるべし、試に今日何爾、何の官、何の長、何の技師といへるものゝ表皮一面を剝ぎ去て、赤裸々たる其眞相を見、其箇中の秘を發き來れ、我利〳〵の結核性黴菌が其體身に蔓延するを見んのみ、余輩は此に於て道德的精神を注射し、大に國民の公共的事業の振張を圖り、此結核性黴菌の排除に勤むるあらんと欲す、

論說

想思界の無政府と半熟の進歩派

森川一

「アド、アストラ、ペル、アスペラ」とは嘗て羅馬人が相傳へて互に警醒せし所の語句にして、困難に由て天上に昇り、艱苦を嘗めて初めて光明を見る希望の奬勵たりき、此語は余輩が終生記憶して一日も念頭を離れざらんことを期し、又半成半熟の余輩をして、絕えず將來の大進歩に牽引誘導する無二の刺激劑たらしむ、余輩が此思想を以て唱導皷吹せしと實に一再ならず、而して尙且之を言ふ、蓋し故ある也、

思ふに、國民の進歩を阻礙するものは、頑固舊弊の思想を有する白髮の老爺に非ずして、寧ろ半成半熟の進歩に甘んじて更に一轉化を試むる能はざる國民の一部にあり、八十の老翁に至りては固陋の見を以て進歩の大潮流に抵抗せんと欲するも到底不可能の事なるを以て、彼等は早晩此大潮流に押し流さるゝの止むを得ざるものあるなり、唯夫れ此際に當り一知半解の徒、雜然として半通の書、半知の學に依て國民の思想を攪亂し、讙噓跳踉、奇に騁せ功を鬪はし、得々、半熟の進歩を代表して、亂りに跋扈横行の暴を極む、我國今日の思想界は或點に於て殆んど無政府同樣にして各〻勝手なる獨斷論に西洋流の潤色を施す和洋折衷料理派と若くは西洋半熟派の得意時代なるか

凡々、上下三千年の廣大悠遠なる歴史を有する日本國民をして彼の建國僅に百有餘年何等法制の模範として取るべきなき米國風の自由制に從はしめんとし、或は政體風俗を異にする彼が半面皮相の社會主義を注入し、平等、公平、進歩と稱する美名の下に漸々國民の統一、國家の膨脹を破壞妨碍せんとする半熟論者に贊同せんとするとの何ぞ奇なるや、又彼米國が日々其モンロー主義の舊套を脱しつゝあるとをも解する能はずして、今後益々接着せんとする人種問題宗教問題其他幾多の難問題に對する何等の主義方針なきが如き何ぞ其言なるや、嗚呼日本國民は尚大に進歩せざるべからず、尚大に其半熟的思想を消化せざるべからず、能く食し、能く消化し、能く運動して初めて健全なる腸胃を有するが如く、能く聞き、能く學び、能く同化し、能く自ら處するを知るに至りて初めて健全なる思想を有すと稱すべきなり、日本國民の法律制度、日本國民の教育、日本國民の美術、此等は相共に現在に於ても、はた又將來に於ても、國家の歴史的發展に從ひ國民全體の思想感情を代表するに足るべき性質を有せざるべからず、然るに何者の眇眼兒ぞ、僅に國民歴史の一部又は一小時期を見て、直に一箇の命題に縮め、或は神代を夢みて偏に過去の歴史を回顧し、國民の主我的利慾心に和して痛罵自ら快とするが如き、眞に憐むべきなり、嗚呼今の人徒に心を浩瀚博雑の書に留め、志を靡麗刻削の辭に勞すと雖、眼を國民全體の歴史に注ぐの明なく、其日本的と唱ふるものは偏狹なる主義の渦中に墮ち、所謂其一小局面を見て、益々其島國的思想を脱する能はざるに至らしめ遂に國民の人格をして愈々矮小ならしむるの弊なきか、又其世界的と稱するものは、自國々民の歴史的位置を忘却し、對外向内の二方面を混同し、何事も例を外國に取り、遂に國民的性格を蔑視するの弊動もすれば之あり、何ぞ夫れ半熟的思想を消化すると能はざる國民のしかく不健全なるや、

見よ日本國民は日清戰爭の紀念として萬國に誇るべき一事業を示せしや否や、獨乙帝國が嘗て凱旋の後建設せし彼の鶴城大學の今日の如く盛なるに引き更へ、我國は尚未だ一京都大學をも完成する能はざるに非ずや、日本國民は今や進歩の途中に於て座礁せり、而して此座礁は罪を未熟の水先案内と航海師に歸せざるべからず、嗚呼未熟の航海師に我國思想界の運命を左右すべき全權を附與するとの何ぞ夫れ危險なるや、今や半熟なる者と幼稚なる者と、眠れる者と後れたる者と、突飛的なるものと頑固なる者と、迷へる者と野狐に類する者と、相議し相駁し、排擠し合一し、紛々し囂々す、而して國民の活氣又遂に求むべからず、佛國は嘗て戰敗の後を受くるに彼リヲン、ゼー氏の如き希有の財政家を出し、悠然として五十億フランクの償金を拂ひ尚綽々として餘裕あるが如く爾來相共に奮勵して國力の進歩實に驚くべきものありたりき、然るに戰勝後の我國は如何、其財政は彼佛國を學ぶと能はず其教育は彼獨國に及ぶと能はず、誠に口惜しき次第に非ずや、今の無教育なるものとは獨り田舍の老翁なりと思ふ勿れ、三百の頭顱を初めとして政府何千の官吏、集めて一團とし再び小學校に入れて、彼等にトランスヴアールの地圖を教うるの時、彼等は初めて自己の價なくして價ありと僞り、傲然として半熟の進歩に甘んずることの非なるを徐ろに解了し得べき也、

嗚呼豎子天下の事を誤るや久し、所詮今の世は殘忍酷薄なるミラボーも卑劣無恥なるロベスピールも尚大人物なりと思ふが如き思想界精神界の無政府時代なれば、幾多半熟的俗論の勢力あるべきはさるとながら、少しく思をめぐらすの時、竦然として膚粟を生ずるを覺えん

偶々史を讀む、曰く寛永十五年正月十日島原の役、松平信綱蘭船を雇ふて賊城を砲擊せしむ其功を奏せず、二十六日夜細川忠利、信綱に告げて曰く、若し急に城を陷れんとせば吾細川氏の兵三分の一を失へば則ち足る、然るに今外人の援助を用ふる實に一大國辱といふべしと、意氣頗る軒昂す、嗚呼我は唯此の如き勇氣を愛す、我は唯此の如き勇氣を愛す、進ぜざる者は須く一鞭を加ふべきなり、

陸海軍の諸學校に佛教々師を容るゝの必要

西山榮久

教育と宗教との關係は目下の一大問題にして、教育家、宗教家、學者、政治家の之を論議討究すること頗る花々敷ものあるを覺ゆ、而も余は敢て之が爲に呶々を用ゆるをせじ、唯陸海の軍人士官養成に方りて須らく佛教々師聘用の必用を主張せんとするなり、

夫れ宗教が一般人民に最要なるは現時識者の認知するところ國民は物質的文明の淺膚なるに飽き、國家は浮薄射利の卑賤なるを厭ひ、切に一大精神的の光明を翹望し、輿論は已に切實なる宗教の來現に鶴首せるもの〻如し、誠に宗教家の乘すべきところ、熱誠家の動くべきとき、豈に手に唾して一大飛躍を試みざるべけんや、而れども土地や廣く人口や多し、一切衆生を開化するは三人五人の能くなし得べきものにあらず幸に全國數萬の僧侶諸氏あり、熱涙以て濺がは何事かならざらんや、余は切に諸氏が奮勵飛躍の壯觀を見んと欲す、

然れとも監獄の如き軍隊の如き、將た學校工場の如きは、布教の難と勞力の多とありて、微力の能く爲し難きもの存し、本山宗務局等の幇助にあらざれは到底豫望を達するを得じ、現時各宗の本山が競うて之が企劃に鞅掌せらるゝは深く多とせべきところ、監獄の如き軍隊の如き已に事業の大に揚れるは、吾人の尤も快とするところなり、就中軍隊の如きは日清の交戰以後大に其規模を改め、各師團各鎮守府至るところに佛陀の德音を宣傳し、國家の干城をして金剛不壞の信仰を陶成し、勇往邁進の氣象を增大せしめたるは事實疑ふべきにあらず、此點に關しては世已に定論あり、亦余が呶々を要せず、

獨り怪しむ、各宗の本山は、何か故に士卒に急にして將校に緩なるや、各聯隊の兵卒は幸に法味を浴するを得れども、各將校佐尉の諸官は全く之に無頓着なり、全く無頓着とは稍〻酷評に過くるあらむも、未だ完全に信仰を確立したりとは云ふ

べからず、彼等果して教ふ可らざるか、佛教果して彼等に滿足を與へざるか、將た彼等位地高く、官重くして、僧侶教師を侮蔑し、容易に其演說法話に傾聽せざるが故に然るか、吾人疑なき能はざるあり、若し果して僧侶教師を侮蔑せるが故に然りとせば、是れ聽者の非なるか故にあらずして、說者の熱誠足らず、高位重官に阿諂するの致すところなるのみ、出家豈に名聞聲譽に恬爾たるべけんや、若し果して此くの如くんは余は特に其猛省を請はんと欲す

其は今尙ほ怨すべしとするも、陸海の諸學校に宗教的教育の存せざるは一大欠典たるなきを得んや、將來の干城は彼等の指揮すべきところ、將來の艦艦は彼等の率ゆべきところ、戰勝以て國威を發揚するも彼等の一擧にして、戰敗以て國民他に隷屬するも亦彼等の一動のみ、事体頗る重大、豈に冷視して可ならんや、

夫れ數十百萬の士卒、將軍の面前皆以て死を誓ふ、而も白刃前に在り、斧鑕後へにあり、其時に方りて却走して死する能はざるもの何そや、其士民死する能はざるにあらずして上不能なれはなり、將官自ら死を怖るれはなり、首長已に却走す、下卒難に死せんとするや難し、下卒能く死生の念を離るとするも、上長にして血肉地に塗れて止むの決心なくんは、戰勝夫れ難い哉、

是に於てか余は陸海の諸軍學校に、佛教々師の聘用を希望するものなり、縱令國家利害の點に見ざるも、人生宗教なき能はず、況んや陸海の軍人は宗教の信念に厚く、未來の安心を渴望せるものなるをや、又況んや國家一大運命の決するところなるをや、各宗の本山夫れ速に着手するところあれや、教育と宗教との衝突は決して此と關係あるとなし、政府者已に各軍隊に布教するを許可し、尙ほ其益〻盛行を希望するに於ては、其諸學校に宗教教育を非認するは是れ自家撞着のみ、縱令彼等にして之を聘用することなしとするも、佛教者にして進むて盡すの決心あらは、彼等は決して辭する能はず、寧ろ大に歡迎せさる可らず、

幸に各軍學校は兵營に近く位し、殊に多く東都、横須賀等の要地に存するを以て、さしあたり、軍隊の布教師をして一週一回たりとも之を開始するを要す、余は切に之を望むものなり、

社會

◎眞宗大學　東本願寺の同大學は其淵源を原ぬれば我邦に於て最も古き學校の一なり、其創設は寛文年中にありといふ、當時猶公然學校を設立するを許されざりしかば、同寺の別墅涉成園中の一部を以て校舍に充て、筑紫觀世音寺の學寮の久しく廢頽せるを其名跡を受承して學寮と公稱せりとか其後寶曆四年に至りて之を高倉通に移して講堂、經藏、書庫、寮舍等を築造して始めて整備し、規摸廣大にして、學徒雲集し、西本願寺の學林と相並びて、德川時代に在りては我邦最大なる佛學の道場なりしなり、兩本願寺が此時代に頗る繁昌を極め、其勢力遙に他宗派を超過したるの原因固より數多あるべしと雖も、他宗派に於ては見るに足るべき學費を有せざるに反して兩本願寺が盛に講學に勉めたるもの其一因たるや疑なかるべし、之を思はゞ現時兩本願寺の當局者等は最教學振興に努むべき筈なるに、實際左は無く、反て之を輕視するの風あるは予輩の常に遺憾としたる所なり、然るに彼等も時勢の趨勢に促されて稍悟る所やありけん、同大學を東都に移して大に擴張せんとて、既に議制局會議に提出して、可決せられ、其費用を拾五萬圓とし三ヶ年間の繼續事業としたりといふ、蓋し寶曆以來の大改革なり、予輩は此改革を美事快擧と稱するに吝ならざるなり、然れども事は言ふは易く行ふは難し、改革案提出の如きは固より左まで難事にあらざるのみならず、議制局會議を通過せしむる如きは一層容易なり、唯夫今後の施設如何は正に當局者の手腕を要する所、予輩は刮目して之を視ん、先に呈せし美事快擧といふ譖辭は今暫く預り置て實行の後更めて進上する事とせん

◎眞宗の三耆宿　西本願寺の島地默雷師の還曆の祝として詩歌俳諧を募集す、東本願寺の小栖栗香頂佐々木祐寛の二師共に古稀の老齡に達す、前者は故山豐後の妙正寺に退隱して靜座念佛を常行して餘生を送らるゝと、後者は頃日同派の議制局會議に彈劾せられ職を辭して自坊に歸臥すと、共に慶事なり、傳に曰く十餘年前には雷霆鬼神をも驚しゝ島地敎正が壽長くして福多きを賀し、小栗栖師は其博學達才にも似合はず兎角の批評を蒙ること多き人なりしが、其老後の殊勝なるを嘉みするなり、佐々木師に至ては此矍鑠爺猶斗米を食し馬上に顧盼する慨あり、滑脫の才猶人を醫弄するに足る者あり と雖も一朝彈劾を受て、忽然勇退す、玉碎とまで行かずとも瓦全には墜す、花々しき名譽の討死を距るや近からずと雖も、又以て嚙り付主義を演せずして、潔く退きたるを讃し、又一方には事の善惡に關せず議制會が停會を受けて迄も、老大物を彈劾したるは、龜の腕にも小骨の有りさうなるを褒するなり

◎保護すべき教育　國家か最保護奬勵すべき教育は最高等學術の研究と、最下層の義務教育となり、國家若し高尙なる學術を要せずと云はゞ止む、然れども理論よりするも實際より見るも國家には學術の蘊奧を窮むる者の必須なるは言ふを須たゞ、然るに斯る研究に從事する者は多額の學費を要し且自活すべき年齡に達せるの人士なれば國家宜しく保護を厚くし、彼等をして衣食の憂なからしめ、學資の欠乏を歎せしむべきなり、之れ一に國家の義務ともいふべきなり、然るに唯一の研究所なる大學院は學生に向て如何なる保護を與ふるか、又義務教育に向て或程度まで國家が保護すべき事は何人も異議なかるべし、去れば歐洲各國に於て公立小學校に對する國庫の負擔の割合は佛國は百分の四十八、獨乙は百分の三十四、和蘭白耳義は共に百分の三十九、瑞西は百分の三十なりといふ、我邦に於ては明治三十年度の比例は僅に百分の二强に過ぎず、今後教育基金の利子及び、小學校教育國庫補助金を合算するも到底總額の一割にも達せざるなり、予輩は思ふ國家は今よりも數層親切に最高及最下の教育を保護すべき義務ありと、

◎運動會　今や秋高くして馬肥ゆるの候、官私大中小の

學校は皆競うて遠足會運動會を爲す、健全なる次世紀の國民を作らんが爲めに這般の催し最必要とする所なり、されば此運動會も近年大に弊害生せしを見る、之を小學校の運動會に察せば恰も女生徒の衣服の競進會の觀ありて、貧苦の父母をして袂を濕さしむ、之を大學高等學校等の運動會に觀れば少數のチャンピオン連が只管勝を爭ひ賞品を貪るを見るのみ嗚呼、世には純利無害の事は鮮しとせば強ち運動會をのみ責むるは酷評たるを免れざるも、職に監督の任に在るものは勉めて弊害を除去し、體育の本旨を忘れず、廣く衆人の利益を收め得る如く注意せられ度きものにこそ、遠足會の如きは稍此目的を達するに庶幾きものか、

◎醫師と貧民　醫は仁術なりとて猥りに貧困者に施療せよといふにあらず、然れども此世智辛き世に在りて、不廉なる藥價と診察料を拂て、名醫國手の診療を請ふは貧民に取りては不可能の事に屬す、又一方を顧みれば、醫術日々に進歩する此社會に處せんと欲せば、醫師は愈益實驗研究を要するなり、然れども都會の地に於てさへ、帝國大學等に關係せる醫師の外は容易く、此實撿を爲す便を得ざるあり、況して僻陬の地に在りては殆と此便を得べからざるなり、之れ共に大なる遺憾といふべし、是に於て東京等都會の地に於ては、杏林の組合會に於て、赤貧者にして難症に罹れる者の身体を買得する事流行し來れり、主治の醫師及び同團体に屬する國手等は、其買ひ得たる患者を懇篤に治療し、生命終れば、會員を招集し、病氣の經過、診斷、投藥及び患部の有樣等を說明して扨後に刀を取て解剖に從事するなり、此研究を終りて後該組合より丁寧に葬式を營むなり、之が爲に無告の窮民も十分治療を受くるを得、杏林社會も實地の研究を積むを得る一擧兩得といふべし、予輩は益此種の組合の發達せん事を希望す

◎說教僧　高坐の上に座して爲すか、テーブルの前に立て爲すか、黃色の聲を張上げて音節流暢に演べ立つるか、將た惇々話すか、夫等說教の作法は暫く措く、其所說に付て聊注文無き能はず、一宗の宗意安心を說き聞かすは固より其の處なれど、說教者に學問あるは玉に瑕なる戲語を眞に受けて、何時も張付法談的のおきまり文句にて其場限り御茶を濁して能事了れりと思惟する如きは最不都合の至なり、見よ宗教家中に在りて最尊信せらるべき筈の階級に在る說教僧は實際僧侶間に在りて輕蔑せらるるは何故なるかを、今にして猶說教家諸師が舊習を脫却する能はずんば、佛教の面目を傷くるのみならず又卿等自身の立場を失ふに至らん、卿等は自ら輕そる勿れ、我邦精神界の一半を支配するは卿等の職分なり、何そ速に起て、大に叫び大に呼び、世道人心の衰頽を挽回するに勉め、世の浮游者が單に投機的に流れ僥倖を希ふの危險なる思想を根絶するに盡さゝる、

◎新平民　近刊の「日本人」大に新平民の教育法を論して剴切なり、彼等は世に齒せられず、智識進まず厭世に陷らずんば自暴自棄に流れ易き境遇に在るの一階級なり、其間に於て僅に一縷の光明を認めて心意を安慰するものは、宗教者の救の手と聲とに在り、之れ理論にわらず實際の問題なり、全國至る處の新平民は殆と皆眞宗の信者にして法主を活如來と

崇信するの徒あり、去れば眞宗僧侶は彼徒を教導化育するには絶好の位置にあるものなり、眞宗僧侶は此位置を利用して彼等を教化すべし、又其信仰を得る義務として彼等教導に勉むべきなり、此等の諸點善く「日本人」に論せられたり、余輩は讀者に向て其文の一讀を勸む、世未だ彼等に同情を有し彼等に注意する者少しと雖も、全國幾萬の新平民の運命、國家に將た社會上に豈輕々しく看過すべけんや、經世家宜しく研究すべきなり、因に言ふ如何なる因緣歷史の存するにか、彼等は多く皆眞宗高田派に屬するものなれば、一層同派の奮發を願ひ度きものにこそ、

雜錄

雲水雜記（二）　久保猪之吉

◎かの順德天皇が一天萬乘の御身をもちてはる〳〵孤島の浪に漂ひ玉ひしは承久のみだれ。此島にとゞまり玉ひしこと廿二年にも近かるべし。御歌においては隱岐に大御心を碎き玉ひし御父の後鳥羽天皇にもおとらせ玉はざりしを。徒らに戀が浦、思の川、名のみとゞまりて御歌御文ののこれるもの無し、まことや天皇の崩御ましましゝ時、池の藏人某といふ武士が後世汚しまつらむ事をおそれて御歌御文等の反古どもは經塚山いたゞきにて燒きはてきといふは誠なるべし。

◎かの日蓮上人が燃ゆるが如き信仰をのせて越後の赤泊より佐渡の松が崎につきしより此島にとゞまりし事四年に近かりき、而して上人の攝受門と見るべき開目鈔觀心本尊鈔の成りしも此間に於てなりき。されば記錄の如何に多くが此島に入りて見らるゝよと樂みしも甲斐は無かりき。嚴重なる鎖鑰を以て守られたる寶物、多くは曼陀羅にあらずんば附會の器物なりき。

◎あはれ上人が菴を結びたりきといふ塚原の三昧堂よ、予が腦中には二樣にも三樣にも想像せられしなり、しかるにその地を踏み見れば一の山なく一の谷無し、唯田野の中に立てる森に過ぎず、瞑目修行の靈地にはあらざるなり。今こゝ塚原山根本寺とて大なる伽藍も殘れ、往昔は茫々たる蓮臺野の一小森林、その中に建られけむ所謂一間四方の小堂は當島の地頭本間六郎左衛門が此大聖を入れむとて設けし靈堂なりき。現時の草堂は昔を忍ぶに足らねども聊か腦中に蟠れる想像を動かすものあり、鉛筆をとりいで、堂の扉に小さくかくぞ記せる。

塚原の御堂のとびら來て打てば
神鳴りいでゝ雨ふらむとす。

◎塚原といふは松が崎より南山といふ連山を越て北にあり、二三里の距離にすぎず、西の方眞野の御陵にも同樣なり。上人が法敵の攻擊を風よりも雪よりも烈しといひしを見れば當時本間の監督も嚴にして淨土宗教徒の數や多かりけむ、今も日蓮宗の寺院は卅三、眞宗淨土合して六十三、勢力分布の一斑を見るべきか。

◎南山の麓に沿ひて塚原を西に去ること一里餘、佐渡唯一の五重塔立てり、地は竹田の阿佛房、寺の名は妙宣寺、境内いと廣うしてかの日野資朝卿の御墓や阿新丸の『かくれ松』と稱ふるものもてゝにあり。河原田町の八田文學士、矢田、金刺等の諸氏に導かれて來しかども、御陵の方に時を費しつるをもて寶物見る暇は無かりき。

◎抑も阿佛房と申すは順德天皇御入島の時、臨ひ奉りし北面の武士、遠藤爲盛の事にして後日蓮上人に歸依し名をも日得と改め六老僧の一人なりき。上人島を出でゝ身延山に入りし後もその跡を追ひて九十幾歳といふに彼地へ赴きしなり順德天皇と上人との間の連鎖にして歴史上年代の關係を記臆するに極めて便ある事實なり。

◎妙宣寺所藏の系圖書によれば此阿佛房と遠藤盛遠即ち後の文覺上人とは從兄弟の關係ありとかや、文覺上人が此島に流されしことは略信を措くべき事にして（隱岐といふ說もあれど）その舊蹟といふ谿間の塚及び瀧は予が親しく睹しところなり。文覺の流罪は順德天皇の前、土御門天皇の御代にあり、順德院遷幸とは廿餘年の差異あらむか、文覺の入定も明かならざれば知るによし無けれども若生存中なりけむには阿佛房と邂逅の期もありけむを。是等の記錄一切見えぬは行客をして失望せしむること多し。

◎文覺の尋常人にあらざりし事は人の洽く知るところなり、これを多分血緣の關係を有しけむ阿佛房と亦尋常の人物にはあらざりし也。見よかの順德院遷幸の當時を記したる記錄を。如何に無膓漢のみ揃ひしぞ、冷泉爲家卿は途にして病と稱し天皇に隨ひ奉ることを敢てせざりき、その外越中越後の境迄來り、北海波浪の高きに恐れて立ちかへりし卑怯武者もありしなり、彼冷泉何者ぞ世々皇室の餘瀝に安逸を貪り自らは歌道の先達を以て任せしもの、不忠の罪既にとはずとするも眞に歌を解し道を思ふものならんには悅びても孤島の月を訪ふべかりしを、佐渡の一孤島は卿の爲めに永世不朽の碑となりきやも知るべからざりし也、しかるに彼その熱なく情なく涙無く誠無し、むべ也、歌道の振はざりしも、かれ遠藤爲盛は此間に立ちて終始變せず天皇の御楯となりし雄者なりき。更に日蓮に歸依して日得となりし迄の遺跡を考ふる時は人をして欽慕にたへざらしむ。

◎塚原の三昧堂夜更けて朔風肌を衝く頃にやありけむ、かの遠藤爲盛は上人を一刀の下に殺さむとて草堂を訪ひきとかや、氏の所屬宗派は禪か淨土か明かならざれども日蓮宗とは異なりしものなるべし、氏が往きて堂前に彳みし時上人は正に端坐して法華經を誦讀せり、氏一刀の下にとおもひし氣も挫け先つ議論を圖はして後にこそと思ひかへし中に入れりとか、しかるに上人の議論如何に鋭かりけむ信仰如何に强かりけむ氏は刀を擲つてその弟子たらむことを誓ひきといふ、上人の感化力强かりしをおもふと同時に氏が心情掬すべきものあるをわするべからざる也。

◎此時爲盛の妻あり、良人の歸家おそきを患ひて後を追ひ堂前に彳みてその問答を聞けりといふ、此亦上人に動かされて

その說に服し後、千日尼と稱へて有名なる比丘尼となる基を開きしあり、是より夫妻心を合せて夜間秘かに糧食をおくり上人に乏きを告けしめざりきといふ。尙伊豆伊東流罪の際彌三郎夫妻の供養に似たりしならむ、されど此は絕海の一孤島、而して有力なる知己の恩、上人の心中歡喜の情は今より尙想ひ見るべし、

◎抑も此千日尼といふは京都に育ちたるもの故歌文の道には秀でたりけむ、されば日蓮が歌をよみ文かく事も學びしは此の千日尼に就きてなりとの說決して憑據なきにあらざるべし、佐渡以來、身延に入りし以來の御文章御消息と稱ふるものが如何に流暢にして如何に活動するかは人よく知らむ、しかもその文体は漢文直譯体にあらず擬古体にあらず自ら一家の風あり、今人のとりて以て則と爲すべきものあり、上人の詠として今も傳はる中に左の如きあり、

おのつから邪にふる雨はあらじ
　風こそ夜半の窓は打つらめ

たちわたる身のうき雲もはれぬべし
　たへのみのりの鷲の山風、

第一首は文永十二年二月三澤某に與へつる書のはしにあり第二首建治元年の作にして身延山記の後に記せり、二首共に調も雄渾にして含蓄も多し、死歌人の傲ひうべきところにあらず、此に注意すべきは二首共に文永十一年佐渡赦免の後にあることなりとす。

◎予は更に千日尼が文學上に於て日蓮に影響を及ぼしたりきといふ事實を信ぜむが爲めに又日蓮の文章が如何に活動するかを紹介せむが爲めに一二の消息文を引用するをとゞめ能はざるなり、上人が入島以前に於て認めたるもの多くは漢文を以てせり、立正安國論しかり、各種の消息しかり、幕府及び鎌倉諸大寺に建言して猛火の如き熱情に包まれし時彼がその弟子に送りたりしは漢文あり次の如し、

就大蒙古國簡牒到來、以十一通書狀方々令申候、定而日蓮弟子檀那流罪死罪一定耳、少莫驚之、方々强言不及申、是併而强毒之故也、日蓮所令庶幾、各々可有用心、少莫憶妻子眷屬、莫恐權威、今度切生死縛令遂佛果給、鎌倉殿、宿屋入道平左工門尉、彌源太、建長寺、壽福寺、極樂寺、多寶寺、淨光明寺、大佛殿長樂寺、（已上十一ヶ處）仍書十一通狀令諫訴候畢、定而可有子細、日蓮昨來而書狀等令披見給、恐恐謹言、

文永五年戊辰十月十一日　　日蓮花押、

弟子檀那中

◎上人が入島出島以後の文は如何、消息といへば必ず國文なりき開因鈔をはしめ著書亦しかり、予をして消息文の一例を引かしめよ、（身延山中よりの消息）

鹽一駄タシカニ送給候、金多クシテ日本國ノ沙ノ如クナラバ誰カ寶トシテ箱ノ底ニ納ムベキ、餅多クシテ一閻浮提ノ大地ノ如クナラバ誰カ米ノ恩ヲオモンセン今年ハ正月ヨリ日々ニ雨フリ殊ニ七月ヨリ大雨ヒマナシ此地ハ山中ナリ上ヘ南ハ波木井河、北ハハヤ河、東ハ富士河、西ハ深山ナレバ長雨大雨時々日々ニツヽク

間山サケテ谷ヲ埋ミ石ナガレテ道ヲフセグ河タケクシテ舟ワタラズ富人ナクシテ五穀乏シ、商人ナクシテ人集ルコトナシ、七月等ハ鹽一升ヲ錢百、鹽五合ヲ麥一斗ニカヘ候ヒシカバ今ハ全体シホナシ、何ヲ以テカウベキ、ミソモタエス、小兒ノ乳ヲ忍ブガ如シカヽル所ニ此シホヲ一駄給テ候御志大地ヨリモ厚ク、虛空ヨリモ廣シ予ガ言ハオヨバズ唯法華經ト釋迦佛ニユヅリ參ラセ候、事多ト雖トモ紙上ニハ難盡恐々謹言

弘安元年九月十九日　　日蓮華押

上野殿御返事

流麗にして意の達するところ羨むにたへたり、その他自ら記せる身延山記の如きは天下の名文なり、予はうの一節を引用せむとはりすれど今はその時にあらざるを悲しむ、心ある人は一讀を惜む勿れ、

◎上人が歌に文に於てその天才の一部を注ぎたるは少くとも頻りに國文体を使用するにいたりしは佐渡入島以後にありしこと信すべし、されは予は千日尼が日蓮に及ぼしたる文學上の感化を以て強ち附會の說として卻けえず、大に可得成の事實なりとおもふ也、さても吾國在來の國文家が是等の名文活文を度外にしたりしは何等の間拔ぞ、彼等は曾て國文の作例として此活動せる此熱情ある一篇をだに用ゐしを見ず又彼等が此に注意せしをも聞かず、抑も彼等は物を看る明なかりしか又は異教とか、何とかいふらむ偏狹固陋の思想に抑塞せられしによるか、かへす〳〵も悔し、

信　　録

加藤玄智

朝參暮請錄

余客秋腸窒扶斯の病よ罹りしより爾來身餘の衰弱疲勞を來たし延いて或は精神經過敏症に或は氣管支可答兒に或は腸胃の病に健康頓に昔に復す可くも非ず尋いで父君亦慈祠を患へ給ひしかば醫師の勸も心に任かせず轉地以て山水の鄉に身心を靜養するの運に至らず荏苒として櫻桃杏李花開き花落ち再び北窓の下に臥して黃梅地に落つる聲を數ふ多雨の季節もいつしか過ぎ去りて三伏炎熱の候となり暑くが如く燒くが如きの驕陽に學舍もその暑さよ堪へすして七旬の日子は此に我等學生を開放して自由の天地に翱翔せしめ山靈水伯亦翹首して我等を待てるものゝ如し此に於てか余も早怒行李を整へて豆東熱海に向ふ小田原より山路七里途は豆州半島に蜒蜒せる突古嵯峨羊腸の險坂遙に天を摩せるの天城支脉の延びて直ちに東海岸に迫まれる全島皆新火成岩より成る宜なり岡島至る所に溫泉の湧出せざる無き熱海は余の明治二十七年の冬春の交を以て曾遊せし所なればその行く道は別に目先きの變りたる所なきも千山萬水行き過ぎ行き涉りて自ら蓬故に逢ふ心地す源の頼朝の石橋山の戰に一敗地に塗れ倉皇船よ乘じて房州に逃れ涉れしてふ眞鶴の岬を右折すれば土地遠かに開け眺望頓に快潤の地を得之た吉濱となす吉濱に金華山英潮院なる淨刹あり寺は曹洞宗に屬す院主西有惠觀主は余と一面識ある人なれば車を同寺の門前に停め暫くその淨話を聞かばやと同寺に詣れば唯見る門前よ江湖會の立標あり導師は西堂和尙西有穆山老師にして楞伽經を提唱せらるゝを報す余大に喜び踊躍して刺を通じ先つ惠觀師に面會し且つ西堂和尙請參して楞伽經の講演に侍らんとを謂ふ惠觀氏心よく余の特志を贊して之を諾せらる此に於て一先づ熱海に至り後ち數日を隔てゝ再び還り來りて吉濱の禪刹に入る山門の裏俗塵の煩なく東馬の囂を絶ち櫻外山高く水長し

江湖會の紀律として詰朝二時禪を離れ東天紅を潮して鷄鳴曉を報ずるの時迄凡そ一時半佛祖前に坐禪す坐終はりて朝勤の鼓鐘初まり午前七時饘粥一椀を啜る午前八時より楞伽經の講演あり講義凡そ二時間夜は七時より坐禪して九時よ至る此他の時間は各人任意に西堂和尙に參禪して道話を聽聞するとを得余も一日

和尙に參請したり當時則ち余の老師より得たる訓誨の要領を摘記すれば左の如し

余窃かに惟らく形而上の事項を解釋說明し吾人に安心立命の立脚地を與ふるものは世に形而上學と宗教との二者あるのみさすれば吾人の依りて以て安心立命するを得るものは又哲學と宗教との二者を出でざるべし然るに哲學は固と人智を基として組織せしものなれば有限の智力を土臺として成れるに由り到底無限絶對を知悉解明し盡くすこと難かる可し唯吾人は吾人智力の本體たる無限性の煥發反照に依りて僅かに其の無限の無限たる所以不可知的の不可知たる理を哲學上聊か想定し得べしと雖も無限絶對の本體其のものに至りては要するに唯佛與佛の智見境遇に到達せるに非ずんば到底了證し得可からざるなり宜なりスペンサーの如きは當初よりして既に業に可知界不可知界の二を區別し不可知界は到底吾人凡夫の窺ひ知るを得ざる所として其範圍に哲學的思索思辨を廢したるとを故に積極的の安必立命を得んとならば勢ひ宗教の援けを籍りて徒らに語を追ひ言を捉ふるの跡を歇めて直覺的に直指端的の道に突入慕過するに非ざれば到底眞實に心を安じ命を立すると能はざるものゝ如し而して眞實の安心立命の域に到達せんには勢ひ信仰の力を籍らざるべからず然り信仰の力を籍らざる可からずと雖も亦愚夫愚婦の如き迷信妄信は到底吾人の堪へ得可き所に非ず吾人の得んとする所は合理的信仰にあるなり然れど此種の信仰は何んせは之を得べきやと問ひしに師乃ち破顏微笑溫乎として答へらるゝ樣世には哲學とか理學とか有限とか無限とか絶對とか相對とか隨分八ヶ間敷議論も聞ゆる樣なれども哲學者理學者の呼ひて以て有限と云ひ相對と論する所の者も實は無限的絶對的のものたるなり又其目して以て無限とか絶對とか稱しをるものも却て又有限的相對的のものたるを悟らず彼等は必竟妄想轉倒の邪見に過ぎざるなり恰も外道の一切皆空と聞けば斷見に陷り涅槃常樂と聞けば常見に墮するか如き是れなり要するに大覺の妙位にある佛知見を以てすれば一切世界は極樂淨土なり迷ひて三界に流轉せる凡夫の僻見を以てする時は其の安きなる尙火宅と一般なるものならん眞實此境界を達見洞知するは克く言句の及ぶ所に非らず言語を以てすれば却て理屈の邪見に陷る自ら坐禪工夫して自身の心性を明らむるより外なし之れ實に維摩の嘿不二ある所以にして文殊の千言萬語に超越すとて釋尊は大に之を稱揚せられ維摩の一嘿雷の如しと說かれたり必竟眞理は言亡慮絶のものなり有と云ひて有にあらず空と謂ひて空にあらず故に永嘉は若し一切皆空ならば皆空と謂ふも亦無けんと此一句實に克く眞理を叩き出して闡明せられたる辭なり眞の證りと云ふも此外には無し必竟自ら座の功に因り觀念工夫して其の結果此境界に到達せねば到底眞の證りは得られぬものなり必竟妄想戲論の雲收まれは無礙正觀の月は自ら浮び來りて本來の面目炳焉として現顯し座脫立亡の極致に至るものなり最も此境に到達するは禪宗ならば座禪眞宗ならば念佛だが一向專念の念佛と云ふても能く其の宗祖の眞意の存する所を尋ねて精索せねばならぬ徒らに座禪ばかりしたり口に念佛ばか

り稱へたとて所詮はなきことなり又佛敎は宗敎なれば信仰と云ふことが非常に大切なり釋迦の說法は之れを信受奉行せねばならぬ勿論初めは世間普通の學者として信仰すると僧侶即ち佛弟子としての信仰とは其信仰上冷熱の度高下軒輊の差も有ることおらんが兎に角信仰心が必要なり彼の不信心なる祖師は各宗を通じて一人も見ぬ所なり先づ參禪工夫して如實に修行し又時に高僧碩德に參請して法を聞かば又其の中に自から大信仰心を生ずべし坐禪の如きも佛所定の法なるが故にとて之れを奉行實修せざる可らず作佛を圖るも亦是れ妄想なり何んとなれば坐禪そのものが既に佛性佛體なれば坐禪の外に豈に作佛の道あらんや唐宋以後考案と云ふものを授けて靜坐工夫せしむること始まりしが成程考案も一の手段方便としては決して惡しきにはあらず然れども之の考案を考ふる事を專務として坐禪は主なり考案は從なり要は心意識の運轉を停め念想觀の測量を止め身心自然の脫落を期するに在り信は實に宗敎の要素なり宗敎には實に信仰心が必要である先づ第一釋迦其の人を信じてかゝらねばならぬ釋迦其の人を信ぜずしては釋迦一代の說法に依りて安心立命することは到底出來ることには非らず世間普通の信より延いて大信仰心を起こすは自ら坐禪工夫するの傍ら自ら師を賴むべき高僧智識を索めて特に參禪して其敎を請ひ師命は充分に赤心を以て迎へ師說は如實に之を信受奉行せねばならぬ故人が師を求むる爲めに萬里笈を負ひて江湖の外に遠遊せしは眞個に所以あることにて充分信受奉行の出來る丈けの師を擇びて道を明らむるより外には安心立命の大導師善知識なる者あるとなし近來禪學流行の世の中にて從ひて諸種の弊風の起り來りしか就中半解半知の禪學を楯に取りて辯を賣て筆を舞はし何々居士とか某居士など稱へて徒らに見識はがり高くなりて信仰心は微塵程もなく佛祖の御前を通行するにも頭も下げぬ輩の如きは老僧の大に譴責痛叱する所なりと之れより漸く談は世事に移り行き宗敎界の惡習餘弊を慨嘆痛論せられ道元源空親鸞等の各宗祖の流風遺韻を欣賛稱揚せられ初面識の余を見らるゝこと宛も慈母の赤子を見るか如く其の間毫も城府を設けず談笑茶話の間に後進を誘導啓發せらるゝの狀實に余の深く肝肺に銘して萬謝に堪へさる所なりし

八月十五日を以て江湖會終りを告ぐ老師は相州御殿場驛の某寺に向ひて巡錫せらる余は此絕學の大德を奉送し久しく余の身心を靜養せしめし吉濱の地を辭して蹤を行雲流水に委して單身豆相の山川に放浪す仰慕恩惟多く相溢豆海亦有情余の意を察するもの、如く前後相長揖して彼此相送迎するの感あり七絕一首

偶受人勇喜宿緣　別開妙法授參禪
願從和尙垂箴言　自行化他期兩全

因に云ふ余が此行實に明治廿九年の夏にして病羸の餘文盛の勞は醫師より嚴禁せられなりしを以て當時何等の日記をものしをかざりしが其後駿海の客舍に於て當時の記憶尙腦中に遺こりなるものを回想し來りて朝暮暮錄錄として敗染しをけり然れは餘身心の疲勞甚しくその記憶も或は誤謬無きを保し難しとす矧んや余の禪宗には全然門外の人たるに於てをや然れは余が月を指すの一指忘れるあるを見て以て直ちに罪を老師の長廣舌の上に判し給ひそ然れば余は本錄を本誌に寄するは頗る汗顏に堪へざるものあり特に余の思今日尙全然四星霜を隔てたる當日と同一なる能はざるものありて存すと雖偶々近角學士が煩忙今回は其執筆無きの故を以て今その缺を補はんが爲めに余が當年の信仰的經驗の面影を止むる余が當年の信念的意識を載錄して余と同樣の惑を懷かるゝ諸士に賀すと云爾

奧村五百子傳（七）

秦　敏之

天野氏の選擧事件は五百子の名聲をして朝野の間に益々顯著ならしむる一助となれり、明治廿四年、帝國議會開設の際に當りて五百子は政治上の熱心に驅られて東上せしとありしに、天野氏は五百子の女丈夫なるを稱揚して之を大隈伯に介す、機敏なる大隈伯は早くも五百子を其味方となすの得策なるを知り、之を歡待優遇して遂に改進黨員の一人に加へ、據て黨勢擴張のことを助けしむ、

五百子の東京にありて、都門の諸名士と交はるや、大に天下の大勢に就て感ずる所あり、富國强兵の最急務なるを悟り、頗る海陸軍人を奬勵歡待することを勉め、諸處に遊說して殖產興業の氣風を皷舞し、其鄕里唐津町を繁榮せしむるを以て自己の任務なりとし、或は官地の拂下を乞ひて町の公有となし、以て軍事上の補助たらんことを期して大に計畫する所あり、或は榎本農商務大臣を說いて官林の寄附を乞ひ、其材木を伐りて唐津橋を架し、或は養蠶學校を起して、地方經濟の基礎を鞏固にし、その唐津鐵道を布設せんとするや、殆んど寢食を忘れて之に盡誠し、遂に其功を奏して大に鄕人の感謝を受け、更に進んで唐津を以て特別輸出港となすに至れり、明治廿七年日淸戰爭起るや、國家といへる感念を以て其全身を鍛ひ上げたる五百子は、又もや半狂人の熱度を以て諸處に奔走し、或は郡役所に至りて大聲其吏員の職務に勤勉ならざるを罵り、或は都鄙の人民に說て義捐金募集に盡力せしめ遂に自から朝鮮に渡りて、軍事上計畫を爲す所尠からず、當時朴泳孝は歸國して朝鮮政府の要路に當りしかば、朴泳孝の大恩人たる五百子の思望は容易に貫徹せらるべき好機運に屬せり、此に於て五百子の勇氣勃々として又抑ゆべからざるものあり、遂に轉じて大連灣に渡らむとす、然るに婦人の悲しさ、決して御用船に乘るを許されず、大同江畔、空しく滿漢の大陸を望むて切齒扼腕す、五百子は後に至りて當時の心情を叙して曰く、「あの時は實に情けなかつたで　睪丸の古手が欲しかつたです」と、而して一座覺ゑず哄笑すれば女史奮然として容を改めて曰く「串談ぢや御座いませぬよ、何でも國のことは、日本の恥にならぬように、旨く日本の御爲になるやうに、身命を拋つてもやる積りで、あの寒中に困難をし、難義をしてまで骨を折るに、婦人は乘せられないといはれて、實に日本も情けないと思ひましたね、是程日本の事を思うて居るのに、こんな婆を摑へてそんなことを言はれたで、力が落ちましたね、法律を改正してもらいたいと思つたね」と、以て女史當時の心情を察すべきあり

日淸戰爭終るや、五百子は、唐津に船渠を作り、又鐵道を延長して唐津灣に至らしめんことを計畫し、自から東都に上りて、諸名士を遊說す、五百子の剛頑不撓、諾せざれば退かざるの强談に至りては、如何なる豪傑と雖、又避易せざるなし、一日尾崎行雄氏を訪ふ、尾崎氏不在なりと稱す、屢々訪問すれ

ども遂に不在と稱して面せず、五百子即ち腰辨當を用意し、進歩黨の事務所に至り、其受附の面前に腰辨當を差出して曰く、吾れ二日間の辨當を用意すること斯の如し、尾崎氏に面せずんば又此處を去らずと、尾崎氏遂に之に面談す、當時武富時敏氏は殊に五百子の擧を助けしかば・尾崎氏後に武富氏に語りて曰く、願くは二たび婆を吾家に送るなかれ、婆の願望は吾れ之を容れんと、以て女史の激烈なる性質を察すべし

かくの如く、女子が諸名士を遊説して東都に滯寓するの間、朝鮮政府は、其留學生を召喚し、歸らざるものに學資支給を停止す、數十の學生爲に飢渴に逼るものあり、五百子之を歎視するに忍びず、其携へ來りたる資を割て之に衣食を與へ、近衛、二條、小笠原等の諸貴族に説て救助費を投せしめ、遂に諸新聞社に交渉して、爲に義捐金募集を爲さしめ、以て瀕死の學生を救ひ得たり

偶ま大谷派本願寺は朝鮮に實業學校を設立し・傍ら布教を爲さんとするの計畫ありて之を五百子に謀る、五百子は固より熱心なる同派の信者なれば、佛恩を報せんが爲に、吾れ豈命を惜まんやとて直ちに之を諾し、其兄圓心、其女滿子と共に十數名の決死隊を率ゐて朝鮮光州に至り、養蠶學校を起して傍ら宗教を弘む、爾來拮据經營、辛酸至らざるなく、同行者中艱難に堪ゑ難くして死に至りしもの數名、今日に至りては存留のもの十名に至らずと雖、五百子の計畫全く其効を奏し、養蠶の事業は、今や其令息令孃監督の下に光州府道臺の事業として計畫せらるゝに至り、光州府民の五百子を畏敬すること神の如しといふ

數月已前、五百子肺疾を患ひ、保養の爲一旦歸國す、然れども社會の大勢は、到底五百子を安眠せしむることを許さず、病魔亦五百子の威風に慴伏して、深く侵す能はず、本月を以て大谷派本願寺の用務を帶びて、新たに渡清の途に上るといふ、豈壯あらずとせんや、護法の青年、女史に對して靦然たらざることを得るや否や

（明治卅二年十一月六日夜半、斯稿完了）

會報

越前

◉南越佛教同志會　本年七月北陸敦賀港に開かれたる佛教講習會の感化的一大現象として、曩日頃、其國本芽嶺北地方において、南越佛教同志會なるものを成立せしよしを聞く。其事業としては、毎年四月八日を以て　釋尊降誕會を開き、又一週間乃至二週間、夏期講習會を催うすべく、其特色としては、殆と地方の僧俗の友愛を敦くし、併びに靜肅に實着に聽聞せんこと是れ也。今該會發起の辭を得たれば、左に掲ぐることなせり。

明治の聖代既に三十有二年を數ふ國政月に新たに實業日に盛んなりと雖惜哉佛教獨り荒廢に傾きつゝあり嗚確固たる佛教的信念を持ち而も敬虔なる佛教的道德を行へる者漸く凋落して徒らに形相に拘泥し世俗に阿諛なる者倍々多く成り行くを見るのみ今や條約改正は實施せられ内外の事情將に煩擾の境に趣かんとす維時偶ま大日本佛教青年會の首唱に係る第八回佛教夏期講習會なる者當縣下敦賀港に於て開かるゝあり幸に之に參列することを得たる余輩南越嶺北の僧俗各々激厲する所ありて一堂に集まり相俱に邁往精進確固たる信念を持ち同歸一致敬虔なる道德を行ひて以て徐ろに佛教の勢運を挽回しつゝ國政と相駢ひ實業と相待たんことを志して此に南越同志會なる者を發起したり是れ這回講習會の餘光とも謂つへく抑亦實に余輩一統が積年の素志とする所なり四方同志の細素諸彦來りて共に興に甘露の法雨に浴して清涼の德風に息はんことを冀ひて已まざる也

由來佛教に緣故深き鄉土なれば、必ずや他日大に成すの時あるべきを信じて疑はず。吾人は同地方諸有志の高大なる志願を讃嘆して措かざると同時に、隨つて其責務の重きに對し、充分の發奮を望まざるべからざるなり。

◉婦人仁愛會　昨年四月より福井市に、禿須彌子の監督に係る婦人仁愛會の設けあり。第一傳道部にては、毎月一回地方の高德を招きて演説説教を請ひ、第二教育部にては、佛教的訓育の下に普通學科を教授し、之を教團と名づけ、現に四十餘名の女生あり。第三圖書部には、内典外典、和漢の書籍・特に婦女の鑑となるべき著述雜誌は、太抵之を聚めて閲覽せしめ居れり。その正會員贊助員、殆んど越前各郡に亙り、四五百名もあり、逐日增加し次第に隆昌に向ひつゝあり。こと し四月同會教團より、報告としておしへの園第一輯を發行したり。專ら　聖諭と佛語とによりて、貞淑の婦女を作り上げんとするもの。吾人が常に需めて、容易に得べからざる、多望にして有益なる會團と謂ふべし。會員たる人々は勿論、其地方人士が博く之が發達を扶助し、天下に好模範を示されんことを望む。

長門

◉下之關佛教青年倶樂部　遙に一篇の趣意書を寄せ來る左に之を紹介せん

佛教盛なれば國家盛なり佛教衰ふれば國家衰ふ佛教の國家と其盛衰を齊ふするは吾人の喋々を俟さる所なり畏くも之を　先聖列皇の詔勅に見て明晳なり抑も我國の眞髓は忠孝のみ忠孝は即ち經尊出生の本懷なり茲を以て佛教と國體とは鳥の双翼車の兩輪其一を缺く可らず斯の如く甚深の關係ありて千有餘歲の久しき治道を補翼し國利民福を謀り來りし佛教の興廢を度外に置き徒らに翁媼の翫弄に付與して可ならん歟國家の最大不幸其之より甚しきは莫し矣　輓近輕佻風を成し道德彝倫の美地を拂ふて空し加ふるに異宗邪教隙に乘じて紛起し我が國體を汚し我が國粹を亂す罪擊至重と云ふべし況んや内地雜居は既に實施せられ而して彼の異教徒は教育に授産に僞文明人の慾望に投じて以て献身的に晝夜孜々として布教傳道に從事せり今にして是等異教徒に對する防禦の策を講ぜずんば國家の前途佛教の將來殆と寒心に堪へざる者在て存ずるなり是に於て乎吾人等一家の相續者たる青年有爲の道俗志士と相謀り下之關佛教青年倶樂部なるものを組織し以て之れが挽回振作の責に當らんことを期す願ふ所は我國體を富嶽の安きに戴き我が國威と佛光を世界の中天に赫灼たらしめ以て　君恩佛德の萬分一にも奉酬せんと欲するに在るのみ蓋くは血あり涙ある道俗志士仁人來り來りて此擧を贊襄し給はんことを懇述

明治三十二年十月

第壹章　名稱及位置

第一條　本部は下之關佛教青年倶樂部と稱し赤間關市東南部町二百十三番地に設く但し支部は便宜の地に置く

第二章　目的及事業

第二條　本部の目的は佛理を發揮し邪教徒を化導し以て國体を悠久に擁護するにあり

第三條　本部は時事を討究し德育の道を講じ殖産の法を圖り慈善事業を振興す

第四條　本部は各地方の佛教團体と氣脈を通じ愛國護法に盡力せんことを期す

第五條　本部は時宜により實施したる事業及目的に關する事項又は有益なる説話等を蒐集し報告書を發行することあるべし

第六條　本部は毎月六日佛教講話若くは演説會を開く

第七條　本部は毎年春秋便宜の地に於て大演説會を開く　（以下略）

會頭久我侯爵一行信越巡回記事

信濃

◉南北佐久郡佛教同盟會　十一月二日午前六時、會頭久我侯爵、總務員近角常觀、侯爵家從中堀駒太郎の三氏上野停車場を出發し、午後一時信州御代田停車場に到着す、同會長岡本靈苗評議員正安寺龍興寺及び佐藤良珍、足立信順、碓井勇海、松山貫道等の諸氏郡役所員警察署員及特別員等出迎はれ、一行同道にて會場野澤町に向ふ、南佐久郡界に至れは郡長濱音之助、警察署長溝口多門司、野澤町長並木松太郎の三氏出迎はれ先導せらる、午後四時宿所野澤町眞言宗藥師寺に着す▲野澤研究會演説　同日午後七時、同會は近角學士に請ひ、城山館に於て學術演説會を開けり、會頭瀬下宗助氏已下會員二百有餘名參聽し何れも大に滿足せり、同會は同志相會して諸般の研究をなし、社會の改善發達を謀る目的にて、會員は親睦を厚くし、德義を守り、特に勤儉美德を養ひ、酒宴の如きは之を嚴禁するの規約を設け、毎月二回演説講話等を開き、通俗圖書館を設け、夜學會を開設し、貧民教育の道を開き、不就學兒童を勸誘して就學せしむる如きは主ある事業なり、而して近角氏は名譽會員たることを諾せり▲野澤高等小學校天長節祝賀會　三日午前九時近角學士同會に出席せり、流石に全國有數の普通教育普及の土地柄とて、設備等よく整頓せり、就學兒童八百有餘名▲同盟會公開演説　午前一

時半城山館に於て開會せり、松山貫道師開會の趣意を述べ、中堀氏精神的結合を論して同盟會の必要を述べ、近角氏は宗教の眞義を論して、信仰問題に及び、國民が信念を修養して道德を挽回し、團結を鞏固にすべきことを論せり、最後に久我會頭出席して挨拶を試み、曰く當地の如き教育の普及せるは最も賀すべきことなり、今後教育の普及と共に、佛教の信念を以て社會德義の基礎を定むべきことを懲徳せられたり、來會者千八百名同地に於ける未曾有の盛會にして、官民、僧俗、青年等一致團結を成したるは今回を以て嚆矢とす▲有志茶話會　演說會に引續き同じく城山館に於て有志茶話會を催す、會する者四百人、最初に久我會頭は道義挽回に付ては佛教の信念を復活せしめざるべからず、而して第一着に各宗僧侶か弊風を改むへきこと、又信徒が眞摯の態度を以て一致團結すべき必要を述べて自ら信徒の一人として同志と共に此任に當らむ決心なりとて滿腔の赤誠を吐露せらる次て近角氏は同盟會綱領を詳辨し午后七時散會▲斡旋の人々　最も盡力せられたるは寺院にては曹洞宗の貞祥寺、自成寺、眞言宗の專立寺、長命寺、淨土宗の光岳寺、常光寺、天台宗の彌勒寺、無量寺、長慶寺等の人々にして前記郡長警部長町長を初として諸員、又佐久新報社の油井能三並木仙太郎兩氏は大に贊同の意を表し便宜を與へられたり、茲に謹て其厚意を謝す▲小諸叢話青年會演說　午後七時野澤を出立して山路四里を經て一行は午後八時小諸に着し、舊本陣に投宿す、至れは青年百名程相會す、云ふ、一行の此に投宿するを聽き、此會を開く、一席の講話を望むと、近角氏乃ち德義實行に關して一場の演說を試みたり

◉佛教徒信濃國民同盟會　四日午前七時十七分小諸一番列車にて一行出立し、上田まで荻原政太氏來迎はれ九時長野停車場へ着す、有志者一同來迎はれ、直ちに西町佛教徒信濃國民同盟會事務所たる渡邊仁兵衛に着す、又本多文學士同行の筈なりしが、急用の爲め明教新誌主筆安藤正純氏之に代り、本日來着一行に加はる▲第二期大會　同日午後二時より寛慶寺に於て第二期大會を開會、會員參集議事の後、會頭一行を從へて出席、本會の綱領並に同會の將來に關する懇篤なる演說あり、幹事長渡邊仁兵衛氏直に起て答詞を述べ、次で近角氏は會頭の演說を布演し、安藤氏亦一席を試む▲晩餐會　此日午後五時渡邊氏宅に於て晩餐を開き、幹事、會計、評議員等席に列するもの二十餘名、會頭一行出席す▲第一回演說會同夜七時より寛慶寺に於て公開演說會を開く、安藤氏「社會の進步と宗教の發達」を演じて後、近角氏は「佛教の將來を論じて同志の結合を促す」といふ題下に雄辨を振はれ熱血の迸る所、發して慷慨の言となり悲憤の語となり聽くもの皆感歎せざるはなかりし、聽衆滿堂三千餘人と注せらる▲第二回演說會　五日午後一時寛慶寺に於て第二回演說會を開く、渡邊仁兵衛氏開會の趣旨を辨じ、次で中堀氏は「精神的結合を論じて同盟會の必要に及ぶ」を、安藤氏は「公認教の精神」を、近角氏は「宗教の內的制裁」を各々滿腔の熱誠を灑で演說す、終て會頭の挨拶あり、聽者亦昨夜に下らず▲一行招待會　演說終て城山館に一行招待會あり、會頭一行出席、渡邊氏の開會の趣旨ありて後、會頭の懇切なる挨拶、剴切なる近角氏の演說あり、集るもの二百餘名▲撮影幷に善光寺參詣五日午後同會役員二十餘名一行來長の紀念として共に撮影す、此日會員の案內にて會頭一行善光寺本堂に參詣し戒壇廻りを爲せり▲斡旋の人々　今回の擧について終始斡旋の勞を取られ此の擧をして遺憾なからしめ、且つ會頭着長の際出迎はれたる人々は渡邊仁兵衛、山田定次郎、荻原政太、宮下甚左衛門、太田權右衛門、北島僖一郎、佐治木清七、前島寛造、森山善兵衛、篠原種次、坂本武助、北澤久右工門、荒井一三等の諸氏なり、殊に渡邊氏は飯山を經て直江津迄見送せられたり、茲に芳名を錄してうの厚意を謝す

◉北信佛教徒同盟會　六日一行は多數の有志者に見送られ、長野發一番列車にて飯山なる北信佛教徒同盟會に向ふ、長野迄出迎せられたる同會員高橋新吉氏の案內にて豐野停車場に下り、更に近處迄出迎せられたる飯山町長等と共に車にて飯山に至る、常山正房、吉田信義の兩氏及び有志僧侶會員數十人數流の旋を押し立て、町外れの河端に一行を迎へ西敬寺に入る、着後直ちに演說會を開き、同行の渡邊氏開會の趣旨を述べ、次で安藤氏は「同盟の急要」、近角氏は「同朋の眞

情」を辨じ、會頭亦一場の談話を試む、聽衆滿堂何れも滿足の色あり、岩倉惠觀、諏訪晩成、高木定嚴、横山了哲、紀浦次郎、高橋利右衛門、小林銀作、山本幸吉、島津助三郎、東平助、佐藤嘉左衛門、上野久二郎、渡邊仁太夫、牧野長藏、小林嘉七、伊藤林右衛門、高橋信吉、上松庄造の諸氏斡旋最も力む、深くうの厚意を謝す、同會々則の梗概左の如し

北信佛教徒同盟會則

第一條　本會ヲ北信佛教徒同盟會ト稱シ本部ヲ下水內郡飯山町ニ置ク

第二條　本會ハ綱素ヲ論セス佛教的道德ノ感化ヲ受ケタルモノヲ以テ組織ス

第三條　本會ノ目的ハ佛教本來ノ面目ヲ發揮シ其感化ニ依リ先ツ國民ノ一致力ヲ鞏固ニシ以テ當國ノ衝ヲ講シ國家ノ獨立ト社會ノ文明トニ資セントスルニアリ

第四條　本會ノ目的ヲ達セン爲メニ本會ノ事業方針ヲ定ムルヿ左ノ如シ

一佛教ノ研究及演說講話一慈善事業一公共問題ノ研究一殖產公業ノ奬勵

越後

◉越後長岡　飯山の演說終て一行直ちに踵を返へして豐野停車場に歸り、同驛終列車に乘じて直江津に着す、鈴木峰映氏出迎の爲出張せらる、此夜同地旅館烏賊權に泊す、七日直江津一番列車にて鈴木氏に導かれて十時長岡停車場に着、大谷派三條教務所管事三牧良慶、辨護士山岸普該、山岸慈純其他十數名出迎せらる、停車場前升屋に小憩、會場眞照寺に着す▲演說會　午後一時開會辨護士山岸普該氏開會の趣旨を述べ、第一席中堀氏「同盟會の將來」、第二席安藤氏「宗教制度に就て」、第三席近角氏「歷史哲學上より見たる現今佛教の位置」について各肝膽を披瀝して本會の精神を述べ、聽く者をして皆精神的結合の必要を感せしめぬ、次で會頭出席一場の演說を試み、更に聽者の同情を惹けり、來會者千余名滿堂立錐の餘地なし▲懇親會　此夜同地常盤樓に懇親會を開く、郡長、警部長、町長、軍醫等をはじめ地方有志者の來會者六十余名、會頭一行を從へて出席す、町長開會の辭を述べ、會頭の挨拶に次で近角氏の演說あり、一人起て今回の擧を機として長岡佛教同盟會を結成せんと唱ふ、滿堂擧て之に同じ、遂に遠からずして組成することに決せり▲斡旋の人々　今回の擧について終始斡旋の勞を取られたるは山岸普該、長谷川久四郎、志賀定七、鈴木峯映、田宮宗城氏を初めとして阿部致、秋庭半、星野信五郎、椰野直、岸宇吉、甲野恭造、若杉權一、稻川次郎次、星野芳次郎、松田周平、野本恭八郎、遠藤清平、野本松二郎、岸庄七、渡邊多四郎、吉村文四郎、羽賀虎三郎、藤田榮吉、池田忠藏、駒形作七、谷利一郎、小林庄平、水瀨多忠次の諸氏なり、茲に何れも謹て厚意を謝す、而して越佐新聞記者味方友次郎氏大に贊同して力を致さる、此夜眞照寺に泊す

◉越後三條　八日多數の有志に送られ同地二番列車にて三條に向ふ、警察署長野本兵馬、大谷派三條教務所管事三牧良慶外數名の出迎人と共に大谷派別院に着す▲演說會　午前十一時三十分別院にて演說會開會、鈴木峯映氏開會の趣旨を辨じて後、安藤氏は「文明と宗教との關係」を、近角氏は「感應道交」を演ず、終て會頭出席一場の挨拶ありて散會、聽衆夥多くさしもに廣き本堂も滿堂錐を立つるの餘地なく、その數四千餘名と注せらる▲茶話會　演說終て衆樂館に茶話會を開く出席者二百餘名、はじめに安藤氏は宗教的事業の必要より說き及して佛教團體の設立を勸誘し、終て會頭の懇篤なる談話ありて後、近角氏は我邦佛教發達の歷史より諄々說き去り、說き來りて、奮勵一番精神的大同盟を結成して精神界の統一を計らざるべからずと論ず、時起て團體設立を叫ぶものあり、一同之に贊して遠からず事成らんとするが如し▲斡旋の人々　町會議長近藤耕造、縣會議員大谷卓爾、郡書記田中金四郎、同大倉廉平、教務司計苗村仙四郎氏等周旋最も力む、茲に錄して深く其の厚意を謝す

◉尙、一行は九日新潟、十日柏崎、十一日高田、十二日新井巡回の筈なるが本號編輯の切迫はその通信に接せざるを以て更に次號に報道することゝせん

◉北陸巡回の豫定　會頭久我侯爵は來る十六日夜出立して越前、加賀、能登、越中及び近江を巡回せらるゝの豫定なり、是亦次號に於て詳細報道することゝせむ

本部廣告

會頭久我侯爵一行巡遊の節は御懇切なる歡迎を辱うし感銘の至に不堪候、茲に謹て信濃、越後有志諸彦に感謝す

十一月

大日本佛教徒同盟會本部

耶蘇教非公認論

特別減價郵税共　金拾錢

申込所

大日本佛教徒同盟出版部

(明治三十一年十二月二十六日遞信省認可)

政教時報第二十一號目次

●社說　現時の宗教制度問題は征韓論當時の對外問題に同じ

●論說　餘裕なき文部當路者

●社會　◎第十四議會◎雲照律師と日白僧園等

●雜錄　西藏通信

●信界　靜觀錄——(十五)信念の修養は實際問題に如くはなし

●今昔　奥村五百子傳(六)

●會報　◎大日本佛教青年會秋季大會等

本誌廣告

一、本誌は毎月二回(一日、十五日)發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれは御注文に應せず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全國無遞送料
金貳錢五厘	金五錢	金參拾錢	金六拾錢	

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

東京市本郷森川町一番地

發行所　大日本佛教徒同盟會出版部

明治三十二年十一月十四日印刷　明治三十二年十一月十五日發行

發行兼編輯人　上村幸三郎
印刷人　清水朝太郎